

状況の中で、何を考慮して、どういう思考プロセスでその問題に対して取り組んでいけばいいのかという技法の部分伝えていく。そのようなプログラムを作ろうと思って、今年度、附属中等学校の先生方と協働して、今まさにプログラム、モジュールの作成を行っているところです（図7）。

●マイノリティを包摂した共生社会を生きる上で必要となる力

- ・「知識」のみならず「解釈」を
 - ・「体験」のみならず「構え」や「関心」を
 - ・「他者理解」のみならず「自己内省」を
 - ・「道徳」のみならず「技法」を
- ↓ ↓
- A. 「他者」に対する心理的距離の相対化
 - B. 多様な生を顧慮する態度の醸成
 - C. 生の条件の非対称性への気づき
 - D. 立場の違いによる世界認識のずれの意識化
 - E. 問題解決に向かう柔軟な思考の育成

図6

●研究計画

- 試行的なプログラム作成
- ・授業実施(2012年3月)
 - ・成果と課題の整理のための公開研究会
 - ・プログラムの更新と教材開発
- ↓ ↓
- ・全国の中等教育において汎用的に実践できる具体的なプログラム(モジュール)と教材のパッケージ

図7

それを通じて、カリキュラム・イノベーションという課題とどう接続していけるかというところは、今後の課題として考えていきたいと思っています（図8）。また後でディスカッションの中で発言する機会があれば、その辺りに触れたいと思います。

※参考資料（図9）

- 教員研修、教員養成カリキュラムとの連関
- ポジティブな価値の創造？
- 新カリキュラムへの展開(教科学習との横断性、社会的ネットワークとの接続)

図8

●「いかにして伝えるのか」という方法論の未整備

- ・「疑似体験」や「当事者の語り」への安易な依存
- ・効果分析の貧弱さ
- 生徒の恣意的・固定的認識枠組みを再生産・強化する危険性
- * 多様な人々の生を支える市民社会・地域社会の包摂力を高めていくための教育カリキュラムとは？

図9

「社会で生きる学力の獲得を目指して」

村石 幸正・福島 昌子

(東京大学教育学部附属中等教育学校)

(村石) 私どもの学校は、さまざまな側面を持っています。双生児の学校という側面もあるし、中等教育学校のモデル校を標榜しているのです。そのような側面もあります。それ以外にも、心理学入門という授業も実践していますし、また卒業研究を始めて今年度で29年目です。高2、高3の2年間をかけて、一人の生徒が自分でテーマを決めて、すべて自分でやっていくという形の授業もやっています。そのような中で、現在、私どもの学校で行っている協働学習という授業のあり方について、教育学研究科の佐藤学先生、市川伸一先生、秋田喜代美先生にご指導いただいております。本日は、本校の協働学習に関する研究、研修を担当している研究部の主任である福島より、その部分に関して報告をさせていただきます。

(福島) 本校がこれまで教育学部と連携研究を行ってきたことと、これからのことについてお話をさせていただきたいと思います(図1)。本校の特徴は、特に二つあります。一つは、協働学習を導入してから、コの字型の形で授業を行ってきているということと、もう一つは、双子たちがたくさん在籍しているということです。今年度までに913組の双子が在籍しています。その中でさまざまな実践や調査、ケーススタディなどを通して双生児研究をすすめています。その双生児法による研究活動は、双生児を通して「遺伝と環境」について広く一般教育に役立てようというものです。在籍数としては、全校生徒740名中約130名前後の双子たちが校舎内に存在するという状況にあります。それが他校にはない大きな特徴と言えます。



図1

未来にひろく自己の確立

学校というものは、教育目標があってカリキュラムが存在するといえます。まずは教育目標をご覧ください(図2)。「未来にひろく自己の確立」という教育目標に対し、具体的な項目として、「豊かな人間」「自主的な思考と判断力」「のびやかな表現力」という3つの柱が立っています。それぞれの教科学習と総合的学習で、「ことばの力」「論理の力」「情報の力」「関係の力」「身体・表現の力」という五つの力を基本として育て、その力を社会に生きる力に繋げていくというのが本校の教育の

ねらいとしています。

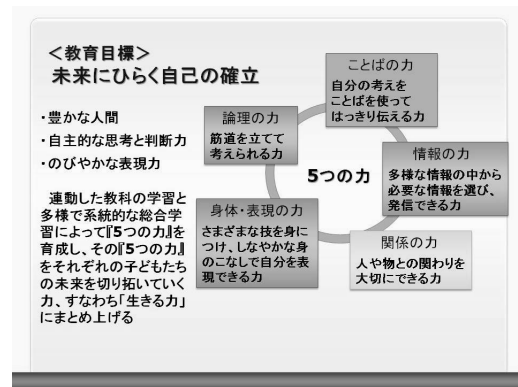


図2

その目標を達成させるためのカリキュラムです(図3)。本校は中等教育学校の6年制の学校で、1~3年生が中学に相当する学年、4~6年生が高校に相当する学年です。その中を2年ごとに区切り、2-2-2制で、基礎期、充実期、発展期という形で教育を行っています。また、6年間の教科学習を見通した中で、中等教育学校の特色を生かし、4年生の授業を前倒して3年生で行うなど、それぞれの教科の中で特徴のあるカリキュラムを組んでいます。

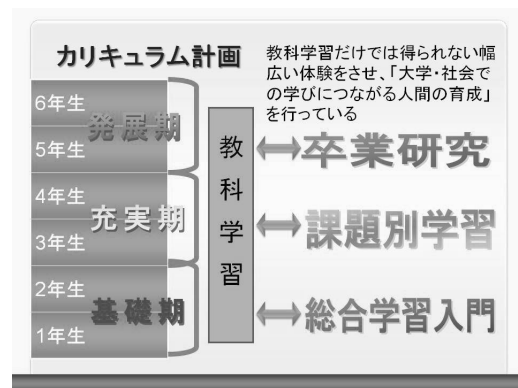


図3

それと並行して、総合学習入門、課題別学習、卒業研究があります。総合的な学習は、先ほどの五つの力のうち、基礎的なものを1・2年生のと

きに充実させるプログラムを組み、3・4年生では課題別学習という、先生方の教科の枠を超えて、よりの専門性の高い特色あるテーマを打ち出し、興味・関心を持った生徒たちがその講座を受けるという授業を行っています。特徴としては、3年生と4年生の異学年で行うということです。そして、それらの最後の集大成が卒業研究です(図4)。一人一人が興味・関心のあるテーマに基づいて、大学のゼミ形式と同様な学習スタイルで論文にまとめ上げていくというもので、これは全国学芸科学コンクールの内閣総理大臣賞や、文部科学大臣賞も頂いています。また、根本先生がこの卒業研究にかかわってくださっているのです、この先どのように変わっていくのか楽しみにしているところです。

5・6年生 卒業研究

自分で決めたテーマを、2年間通して追及し、論文にまとめる。4年間の総合学習の経験をもとに、個性や特性を生かしながら、指導教員の下、自分の力で論文や作品を作り上げる

全国学芸科学コンクール

- <内閣総理大臣賞> 渡辺あやか「野川 ～より良い川を目指して～」
- <銀賞> 杉田晋一郎「夏目漱石の小説に見る空の描写表現」
- <銀賞> 名富桜子「『名富』という姓の男」
- <銅賞> 根岸千悠「日本の子どもの『算数力』を考える」
- <入選> 他20名




図4

教育学部との連携

これまで行ってきた学部との連携の中には、学部の先生が研究されていることを附属をフィールドとして行っている東京大学双生児科学推進事業があります(図5)。これまで66年間、双子と一般児の性格検査、学力検査、知能検査など、200前後のさまざまな検査を行ってきました。現在、紙媒体であるものをデータベース化し、それを行く末は世の中の研究者の方々に提示できるようにしていくといった取り組みです。

教育学部との連携(1)

<東大附属をフィールドとした研究>

- 東京大学双生児科学推進事業
- 学校教育高度化専攻との連携 (平成23年度:21名の実地研究を受け入れ)

基盤(A)科研費(平成23年度から)
*「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究」
*図書館を学習過程の中心に置く
「探求型学習の方法に関する教育実践と評価」




図5

もう一つは、学校教育高度化専攻との連携です。今年度は21名の実地研究を受け入れました。

また、その他に今年度から新しく始まったものとしては、このイノベーションの科研と、図書館を学習過程の中心に置くというものがあります。

また、附属をフィールドとして協力するのではなく、共同で連携で学部の先生方と附属の教員が共に行っているものとして、授業研究と健康教育研究の二つがあります(図6)。

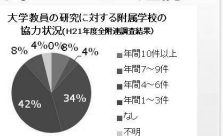
教育学部との連携(2)

<教育学研究科と附属学校の連携研究>

- 授業研究
「学びの共同体」2005年～
「教えて考えさせる授業」2009年～
- 健康教育研究
「発育・発達」身体教育学コースとの連携
「心理教育」

※種々の研究依頼に対する協力

大学教員の研究に対する附属学校の協力状況(121年度を相対調査基準)



協力状況	割合
年間10件以上	4%
年間7～9件	4%
年間4～6件	34%
年間1～3件	42%
不明	0%

図6

授業方法論研究

ここからは、主に学校全体として取り組んでいる授業研究のことについてお話しさせていただきます(図7)。授業方法論研究として、協働学習を2005年度から導入しました。「学びの共同体」は佐藤学先生から、2009年からの「教えて考えさせる

授業」は市川先生からご指導いただいています。そして協働学習全般、また学校の中での研究組織体制づくりに関して秋田喜代美先生にご指導いただいて授業研究を行ってきました。

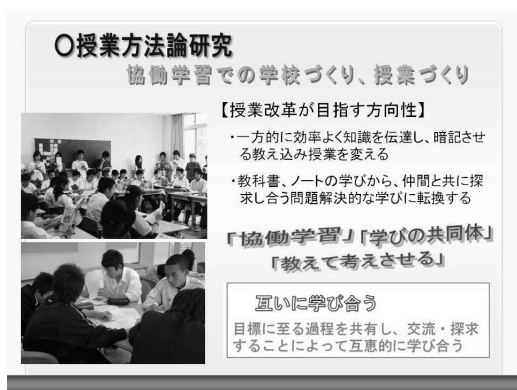


図7

協働学習を通して学校づくり、授業づくりを行う目的は、一斉授業で一方的に効率良く知識を伝達し、暗記させる教え込み授業を変えていくということと、教科書、ノートの学びから、仲間と共に探究し合う問題解決的な学びに変えていくということの2つがあります。

協働学習の機能については、資料に書いてありますので後ほどご覧ください(図8)。

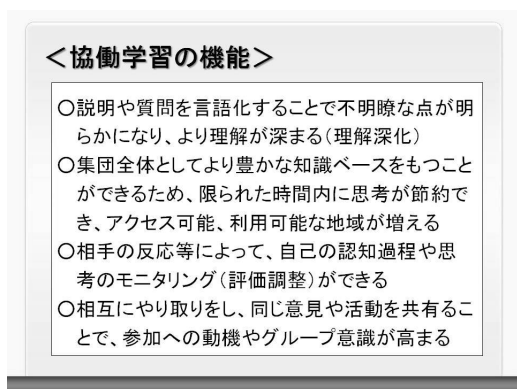


図8

教員アンケートによる振り返り

実際に協働学習を導入して、先生方にアンケート

トを取りました(図9)。その中で、「生徒について」の項目では、多くの意見が出されましたが、学び合う姿勢が生徒に身に付いてきた、分からない子が分かる子に聞けるようになり、分かる子が分からない子に教えてあげることができるようになるという、学び合う姿勢ができたのではないかと、また、人とのかかわり方、関係づくりもかなりできてきたのではないかと、先生方から一番多く挙げられていました。

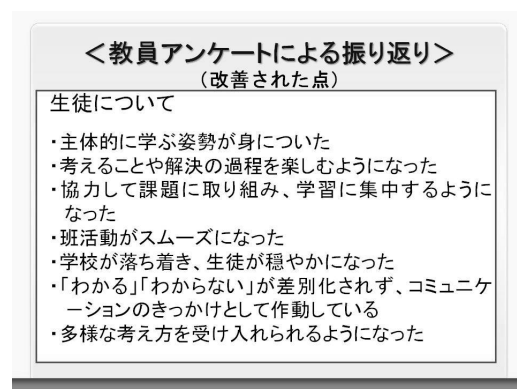


図9

教師・授業については、代表的なものを挙げてみました(図10)。まず教員は、自分の授業を人に見ていただいて講評していただく、または人の授業を見る、あるいは見たとしても意見を言うということには慣れていません。今回、協働学習をすることにより、そういうことに抵抗的な感覚があった先生方も、自分の授業を開く中で、だいぶそれに慣れてお互いの授業について意見交換ができるようになったといえます。また、自分の授業の中で見て、その生徒はこうだと認識していたつもりが、違う先生の授業では全く異なった側面を見せていたということでも、さまざまな角度で子どもたちを見て育てていくことができるようになったと、かなり多く挙げられていました。

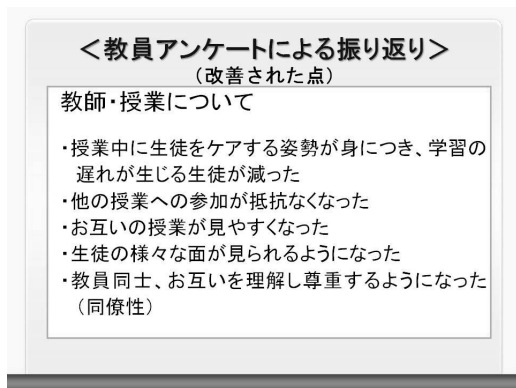


図10

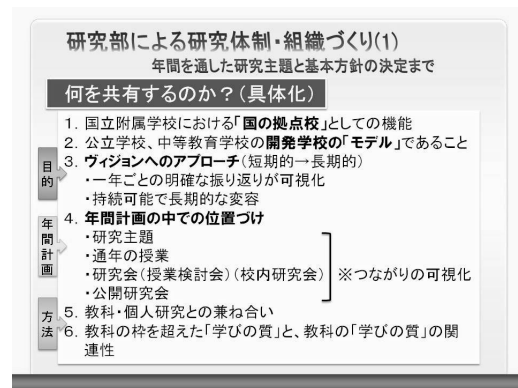


図11

研究部による研究体制・組織づくり

これまででは、附属では自分の授業の中で協働学習を取り入れながらどのように取り組むかということを考えてきていましたが、昨年度から秋田先生のご指導の下で、学校全体としての研究体制をどう作っていくかということの改革が始まりました(図11)。まずは先生方に何をどのように具体的に示したらよいかということで、目的、年間計画、方法が明確に可視化でき、自分たちで理解できるようにすることを中心に考えました。国立の附属という立場から、国の拠点校であること、それから開発学校のモデルであることを常に念頭に置きながら、考えるということです。その中で、単年度で終わるものではなく、長期的な展望をもった中で目標を立て、そして変容が見えるものにしていくということを中心にしながら年間計画を立てました。

研究主題を教員全員で年度の初めに確認し、その研究主題を意識した中で通年の授業を行っていく。そして校内での授業検討会を行い、最終的に公開研究会の場で発信しつつ、全国の先生方と意見交換をして、まとめと振り返りをするという計画を立てました。

その方法としては、学校全体として研究に取り組むだけでなく、研究校の責務としての個人研究と教科研究の兼ね合いとそのバランスをうまく取ることに配慮しました。

今年度の研究テーマ(主題)は、「学びの質を高める協働学習」で、副題が「教科の特性に基づく学びとは」となっています(図12)。このテーマに取り組み3年目になります。周りから見ると「また今年もか」と思われるかもしれませんが、やはり長期的な展望を持って変容するということを考え、一つのテーマを追求してきました。しかし、ただ同じテーマの下で同様の内容を繰り返しているわけではなく、1年を終えたのちに振り返りを行い、反省すべきところを改めて次年度につなげ、それを副題として設定しています。初年度、2年目までは、「教科の枠を超えた学び」、または「各教科に共通する学びの質」についてテーマを掲げていましたが、今年度は学習の基となる教科学習の学びを中心に据えて、教科の枠を超えた学び以前に教科の中での学びの特性をきちんと考えてみる。そしてそれを次に、また教科の枠を超えた、

教科に共通する視点ということで学びの質を捉えていきたいと考え、今年度の副題を「教科の特性に基づく学びとは」ということで取り組みました。

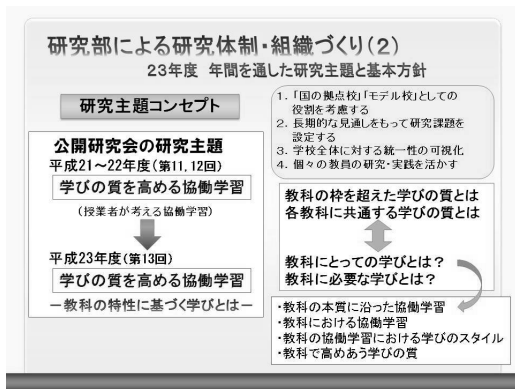


図12

年間計画として、日常の授業の中に位置付けることはもとより、研究会を行うこととし、基本的に全教員が年1回は授業を開くことを原則としています(図13)。年間9回の授業検討会を行っています。学部の先生方からご指導いただく研究会と、教科別の授業検討会、それから学年で生徒たちを見て支えていこうという学年授業検討会です。ここに書かれている一番左側の学部の先生方を中心としながら、多くの先生方が参加して私たちの授業に対してコメントをくださっています。そして最後に公開研究会で発表するという形になっています。公開研究会も今年度で13回目を迎えます(図14)。当初は、中等教育学校に移行した際、研究開発校として始めたことをきっかけに公開研究会を開催しました。その中で、「学びの共同体」を研究開発の6年目の最後の年から導入し、2009年から「教えて考えさせる授業」、そして「協働学習(1)(2)」ということで、現在、三つの授業方法論の中で授業を展開しています。学びの質を高めることを目的とする際に、さまざまな授業方法論を学部の先生方から学び、私たちなりに協働学習を通して「学びの質」を模索している状況です。

協働学習 研究主題を意識した授業検討会

(1) 基本的な考え方
 ・原則として、教員全員が公開研究会も含め年間で1回は授業を公開するようにする
 ・授業と授業検討は、①公開授業、②教育学部の先生、③学年別、④教科別の4種類で行う
 ・授業研究会は原則として以下(2)のような時程と分類で行う
 ・教科別：国語科、社会科、数学科、理科、芸術科/情報・技術科、体育科/家庭科/養護、英語科

(2) 日程
 第1回 4月27日(木) 学部『授業研究会のあり方』(秋田先生)(植坂先生)
 第2回 5月23日(月) 学部『教えて考えさせる授業』(山田先生)(植坂先生)
 第3回 6月30日(木) 学部『学びの共同体』(佐藤先生)(田中先生)(秋田先生)
 第4回 7月14日(木) 教科別
 第5回 9月8日(木) 学部『学びの共同体』(佐藤先生)(小玉先生)(田中先生)
 第6回 10月26日(木) 学年別(佐藤先生)
 第7回 11月16日(木) 学部『協働学習』(秋田先生)(藤江先生)
 第8回 12月16日(金) 教科別
 第9回 1月30日(月) 学部『教えて考えさせる授業』(山田先生)
 2月18日(土) 公開研究会(研究科の先生方)
 第10回 3月(未定) まとめ
 ※この他にもできるだけ学年別の授業研究会を予定し実施する

図13

公開研究会の開催				教育実践研究
研究会	回	年度	研究主題	きょうどう学習の導入
研究開発	第1回	2000	中等教育学校に期待するもの - 学びの共同体	協働学習(1) 協働学習(2)
研究開発	第2回	2001	中等教育学校における前期課程と後期課程との連携を図る教育課程の研究開発	
研究開発	第3回	2002	6ヵ年一貫教育の新たな課題 - 中等教育学校のメリットをどう活かすか -	
研究開発	第4回	2003	「5つの力」の育成をめざして - 「言葉の力」「論理の力」「身体・表現の力」「読解の力」「関係の力」	
研究開発	第5回	2004	6年制中等教育学校で身につけたい力 - 中高一貫教育で変わる生徒の学びの姿	
研究開発	第6回	2005	6年一貫の学びを支える教材・カリキュラム	
公開研究会	第7回	2006	6年制中等教育学校で身につけたい力 - 中高一貫教育で変わる生徒の学びの姿	
公開研究会	第8回	2007	6年一貫の学びを支える教材・カリキュラム	
公開研究会	第9回	2008	6年一貫の学びを支える教材・カリキュラム	
公開研究会	第10回	2009	6年一貫の学びを支える教材・カリキュラム	
公開研究会	第11回	2010	6年一貫の学びを支える教材・カリキュラム	
公開研究会	第12回	2011	6年一貫の学びを支える教材・カリキュラム	
公開研究会	第13回	2012	6年一貫の学びを支える教材・カリキュラム	

図14

図15の右は、公開研究会の一般参加者の人数です。2003年で突出して人数が増えているのは、中・高一貫研究大会と本校の公開研究会の2日間の合計人数で示されているためです。それ以外の年度を見てわかるように、実質、研究体制を採って学部の先生方からご指導いただくようになってから、ぐんと参加者が増え、昨年度からは人数制限をするほどになりました。その要因として、授業に関して私たちも「学びの質を高める」ということに意識を高く持ち、全国の教育関係者の方々と意見交換を行い、授業を、学校を公開することと、発信する体制が整えられてきたということがあるのではないかと考えています。



図15

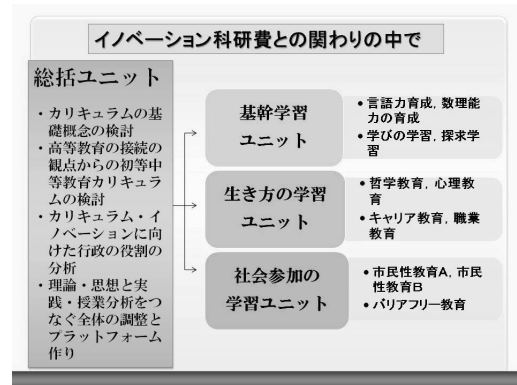


図16

イノベーション科研費との関わりの中で

シンポジウムのテーマであるイノベーションとのかかわりの中で、「基幹学習」「生き方の学習」「社会参加の学習」の三つのユニットと、総括ユニットを設けて取り組んでいます(図16)。このプロジェクトが本校にどのように関わっているのか、「基幹学習」を黄色、「生き方の学習」を水色、「社会参加の学習」をピンクで色分けをして表しました(図17)。これだけ多くの研究グループが今年度、本校の先生方の授業の中に入ってきています。その12テーマの中には、実際に授業の中で行うもの、それぞれの先生方の中で研究が進められていて、調査・観察を授業の中あるいは授業外で行うもの、附属の先生方と共に新しいプロジェクトを立ち上げていくものがあります。本校の教員は一人二～三つのテーマに所属しながら、学部の先生方と共にこの中に参加しています。また、この他に13グループとして附属側から立ち上げた「総合的な学習のあり方」と題したプロジェクトもあります。これだけ多くの数のものが入ってきている中で、3年後、どのような授業になっていくのか、どのようなことを学べるのか、大変期待しています。

イノベーション科研費との関わりの中で

№	ユニット	タイトル	授業時間を利用	調査・観察(注1)の活用	新しい授業を推進(注2)する
1	基幹学習	中等教育段階における文法指導に関するカリキュラムと指導法に関する調査研究	○	○	
2	基幹学習	多言語力強化を図る総合的な学習の時間の活用と学び方の支援	○		○
3	基幹学習	多言語力強化を図る総合的な学習の時間の活用と学び方の支援	○		○
4	社会参加の学習	シニアシニア教育のカリキュラム開発	○		○
5	生き方の学習	学校現場における予防的心理健康教育に関する研究	○	○	
6	生き方の学習	ライフキャリア教育の可能性の検討ー社会参加プログラムを高めるために	○	○	
7	生き方の学習	関係づくり能力アップのための心理教育プログラム	○	○	
8	基幹学習	読書力と読書型学習の進め方と学校図書館の関係についての研究	○		○
9	基幹学習	数理能力の育成プログラム	○		○
10	社会参加の学習	先生の作法と教法を育てる学習プログラムの開発(仮)	○	○	
11	社会参加の学習	教育の職業的意義	○	○	
12	総括	中等教育と高等教育の接続			○
13	総括	中等教育学校における総合的な学習のあり方			○

図17

附属学校の今後

最後に、附属学校としての今後について、イノベーション科研費プロジェクトとのかかわりの中で見てみると(図18)、国立大学附属としての使命と役割から考え、あくまでもモデル校であること、国の拠点校であることを念頭に置きつつ、「日本の教育のあり方」を意識し、附属学校としての「教育実践研究」を「これからの学びのスタイル」「授業のスタイル」等の授業改革を推し進めるということが一番大きなことになるのではないかと思います。また、最先端の教育学研究を行う学部と、教育研究の実践の場としての附属学校が共同・連携研究を行い、「社会に生きる学力」の獲得を目指した教育をしていくことが私たち附属の役割であり、使命だとも考えています(図19)。

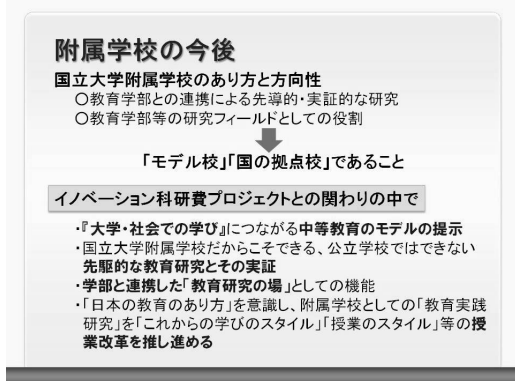


図18



図19

指定討論

「カリキュラムの政治性の視点から」

金森 修（基礎教育学コース）

私はフランスの哲学を背景にしているので、大ざっぱに言うと哲学で、しかも、恐らく割と古典的な物の考え方をする人間だと自分で分かっていますので、そのつもりで今日はお話をします。

「社会に生きる学力形成」ということで、いろいろお聞きし、特に最後の福島先生からは協働学習に関する非常に興味深いお話を伺いました。これが協働学習という意味での、例えば社会的なレリバンスということであれば、確かにわれわれが大人になってから、ある個別の問題を与えられたときに、単独で仕事をしている場合もちろんありますが、より多く、より頻繁には、共同で教え

たり、教えられたり、協力し合いながらやるのが普通になるわけです。それを考えると、高校に入った時点で既にそういう様式で学ぶということはとても素晴らしいと思います。社会的レリバンスという概念自身と照らし合わせても、極めてレリバントな作業だと思います。

ただ、今日、私が主にお話しすることは、それとは若干違うことです。5人のお話の中では、主に佐藤先生のお話を念頭に置きながらお話ししようと思います。哲学ですので、概念的な詰めをどうしてもするので、最初に出てきたアカデミズムを背景にした教科教育で、上意下達的に行うものと、それが古いものだとすると、より新しいものとしての社会的レリバンスという概念図も、明確なようでいて、それほど明確ではないように私には見えます。社会的なレリバンスということで、福島さんたちがなさっているようなことであれば非常にいいのですが、社会というときに、みんなで共同作業で分からないものをいろいろ探究するだけではない形での社会の切り口も当然ながらあります。

社会に対応する知識

一番分かりやすい理科を例に取ります（図1）。個人的な記憶に頼ることになって申し訳ありませんが、私が間違っていなければ、私は54年に生まれているので、60～70年代前半に子ども時代を過ごしています。中学から高校に入ったぐらいのころに、高校の学習参考書で、例えば幾何光学に相当するもの、つまり凸レンズや凹レンズなどを非常に複雑に組み合わせて虚像や実像を作るといったいろいろな練習問題がありました。若干先輩の人たちは、非常に細かい幾何光学の訓練をしていましたが、私のころには既に下火になっていました。今考えてみると、その後大人になって、キヤノンだのニコンだのに入って光学系のエンジニアになる人たちの知識を準備させるものとして、中学の終わりから高校ぐらいにかけて、そういう訓